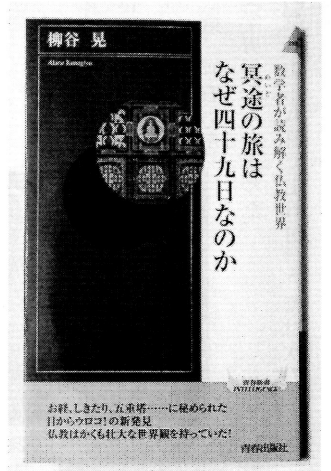


書評

柳谷 晃著
『冥土の旅は
なぜ四十九日なのか
～数学者が読み解く仏教世界～』

青春新書、青春出版社、2009年5月

経営ビジネス学科
森川 展男



「人の噂も七十五日」「除夜の鐘百人の煩悩」「四十九日忌明け」など数字の入ったことばが日本語には数えきれないほどあります。アラビア数字を基調とする近代数学と東洋文化のひとつである日本文化になぜこのように西洋の数字が入っているのか以前から好奇心を持ってきた人は多いはずであろう。

柳谷 晃著『冥土の旅はなぜ四十九日なのか』数学者が読み解く仏教世界』（青春新書、青春出版社、二〇〇九年五月）を読み、これまで謎であった多くの数字を使った表現を解き明かしています。著者の柳谷氏は仏教の經典をつぶさに調べ、こうした表現の多くが仏教に由来することばであると結論付けています。いくつか紹介しましょう。大みそかの夜に除夜の鐘と呼びを108回打ちます。「百人の煩悩」については、以下のように解析しています。

百人の煩悩の内訳ですが、最初は「六根」（眼、耳、鼻、舌、身、意）の六つの感覚器官があります。それぞれが、「三不同（好平、悪）の三つの感じ方をするわけです。その感じ方の程度が「染と浄」に二つに分かれます。これらが三世（現在・過去・未来）にわたって人を悩ませます。ということ、全部でいくつにならるかという、 $6 \times 3 \times 2 \times 3$ という掛算で、百人になるのです。（104頁～105頁）

古来、洋の東西を問わず、数字の奇数が陽、偶数は陰で、奇数は割り切れない数字で「吉」とし、後者は割り切れる数字で「凶」としてきました。中国の陰陽思想は前者が陽つまり、「吉」で、後者は「吉」とされています。一方、現代人は「九」は「苦」とも読めるためわれわれは「九」は凶数と思っています。一体吉凶どちらなのでしょう。か。「九」が「悪役」である所以を著者は能の作品『殺生

石』の出でくる九尾の狐とこのモデルとなっている殿（紀元前十七世紀～紀元前一〇四六）を滅ぼしたとされる逸話の中の九尾の狐をいづれも悪役とみなされているが、実は、「九」は数字の中でもっとも大きなものだから縁起よいとされてきました。ちなみに九月九日は「重陽の節句」で陽の気が重なるため不吉とされるそのお払いの行事としてお祝い事、おめでたいこととした言われが残っています。もうひとつ「四十九日」を筆者は次のように解説しています。死んだ人は、中有（中陰）という、現世と来世の間にある世界をさまよいます。七日間ずつ七回さまよって、七回の審判を受けます。それで本来七日ごとに追善供養をし、最後が四十九日の法要となるのです。（170頁）

また、中国の道教の教えで、故人は「六道」に行き先を振り分けられます。六道は「天界」「人間界」「修羅界」「畜生界」「飢餓界」「地獄界」。六道の行き先を決める審判とその日にちにも掛算を使っています。

- 審判を担う十王は次のとおりです。
- 十七（初七日）日（七日目） 秦広王（ここは書類審査）
 - 二十七日（十四日目） 初江王（三途の川を渡る）
 - 三十七日（二十一日目） 宋帝（生前の邪淫の罪が裁かれる）
 - 四十七日（二十八日目） 五官王（秤を使って生前の罪状の重さを量る）
 - 五十七日（三十五日目） 閻魔王（水晶の鏡に生前の行状を映す）
 - 六十七日（四十二日目） 變成王（五官王の秤と閻魔王の鏡で再審査）
 - 七十七日（四十九日目） 太山王（この最後の審判で、行き先が決まる）
- この後、一応、この審判のあと故人の行き先が決まるのですが、まだ、助かる見込みがあります。

- 百か日 平等王
- 一周忌 都市王
- 三回忌 五道転輪王

と三人の王さまが続くからで、合計で十王となります。（168頁～169頁）

数学は西洋の学問とばかり思ってきた人にとってはある意味驚きかもしれない。中国や日本でも西洋と肩を並べる数の概念への明確な思想を持っている。筆者の言を借りれば仏教、とりわけお釈迦さの教えに由来するところがかなりであろう。数字が苦手な人にも分かりやすく解説を加えられており、まさに目からうろこである。お勧めの一冊である。